

清少納言のたくらみ

京都学園大学教授 山本淳子^{やまもと じゅんこ}

自分にとって大切な人が苦境の中にいる時、どのような言葉をかけるだろうか。もしもその人が若くして世を去ってしまったら、その後は心の中でどのように語りかけ続けるだろうか。『枕草子』は、清少納言が仕えて敬愛した皇后定子のために、そうした思いを込めて記した作品である。しばしば作者の個人雑記と見られがちだがそうではなく、制作は定子の命で始められた。だが定子は悲劇に見舞われ、やがて早世した。初段「春はあけぼの」の、闇に朝の光が差し始める瞬間の光景は、そんな定子に対する清少納言からの労りであり、祈りだったのである。

清少納言が定子に仕え始めた頃、定子は一条天皇の唯一のきさきで、熱く愛されていた。父は関白で、家は栄華を極めていた。ところが二年後、父が死に、翌年には兄弟

が愚かな罪を犯す。

処罰は流罪。逮捕を嫌がって兄弟のたてこもる邸には、野次馬の群がる中、検非違使が搜索に踏み込んだ。絶望した定子は、その場で衝動的に出家した。すべて、当時の貴族がリアル

タイムで日記に記した事実である。女性の出家は当時、魂の自殺にも等しい行為だった。栄華の極みから没落へと、定子の人生は急転した。そして清少納言が集中して『枕草子』を執筆したのは、こうした事件の起きた後のことだった。状況の悲惨さゆえに、作品は逆に明るく作られたのだ。

作品制作の計画が持ち上がったのは、定

「枕」の制作を委ねたのである。

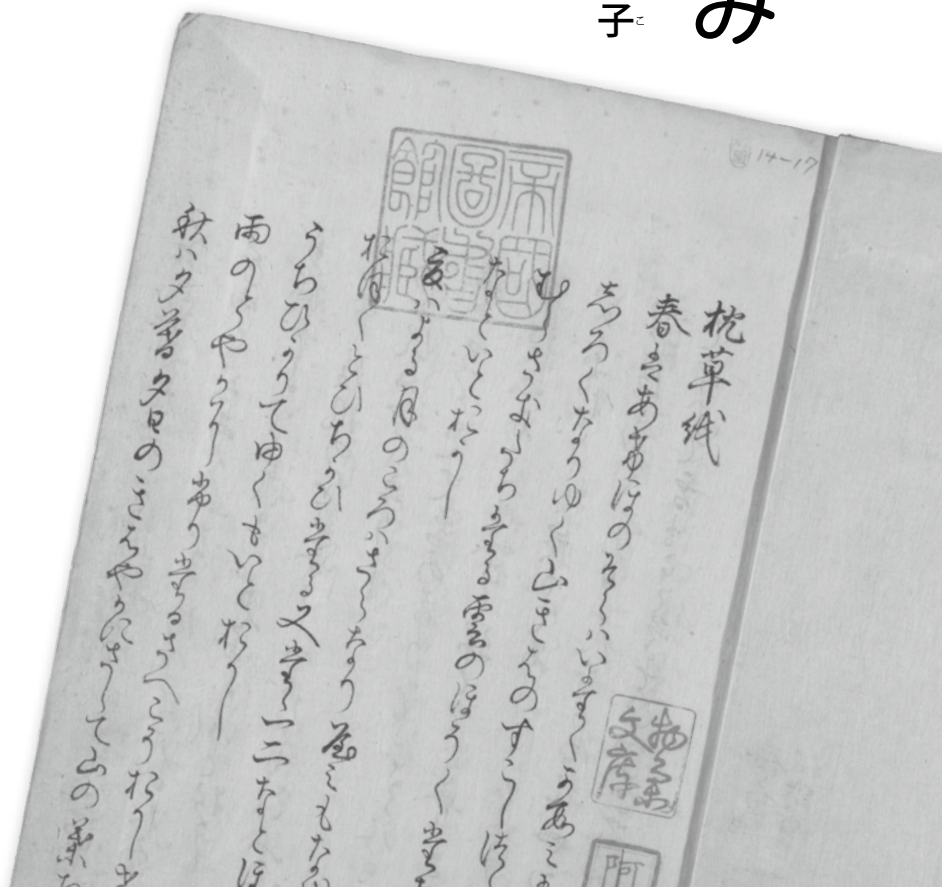
不幸にも、清少納言が本格的な執筆に取り掛かる前に、定子は悲劇に見舞われた。だが『枕草子』制作計画は途絶えはしなかった。定子は再び清少納言に紙を与え、清少納言は定子に伝えて第一期『枕草子』の献上に漕ぎつけた。だがその四年後、結局定子は二十四歳の若さで崩御した。最後まで天皇に愛され続け、娘の彰子を入内させた藤原道長からはそのためにいじめられ、貴族社会で孤立する中の死だった。

今、私たちの知る軽やかなタッチの随筆『枕草子』が、こうした苦しみに満ちた背景から誕生したことを、作品にふれる皆に知ってほしいと、私は思う。だが、清少納言は余計な事と嫌がるだろう。彼女が『枕草子』に込めたたくらみにとっては、それは余計な邪魔立てに他ならないからだ。清少納言は定子の死後も『枕草子』を書き続けた。一つには定子への鎮魂、一つには悲劇の人という定子のイメージを作品によって塗り替えるためである。『枕草子』の中では、定子はいつもにこやかに笑っていて、まるで人生に影一つなかったかのようだ。定子の死後、清少納言はそんな定子のエピソードを、ブログのように書いては周囲に送り続けたと思う。その際、権力か



1960年、石川県生まれ。京都学園大学文学部教授。京都大学文学部卒業後、高等学校教諭などを経て、99年京都大学大学院人間・環境学研究科修了、博士号取得（人間・環境学）。『源氏物語の時代』（朝日新聞出版）で第29回サントリー学芸賞受賞。著書に『枕草子のたくらみ』（朝日新聞出版）など。

▶『枕草子』（異本）冒頭
（画像：国立国会図書館ウェブサイト）



特集

『枕草子』再研究